

按火爐俗云火鉢也。○中 七釐爐中有鐵篋盛炭、篋下橫有風口、火自熾、以煎藥、煖酒、炭價纔不至一分、因稱七厘。

〔俗つれぐ〕二作り七賢は竹の一よに亂れ

是は一杯呑處と、各々同一心になつて、爛鍋で通ふ事しどけなく、後は七輪取寄せ、五升樽も大方に傾く。

火吹竹

〔書言字考節用集七財〕吹筒ヒラキダケ吹火筒ヒフキダケ火管ヒフキヅ

〔重修本草綱目啓蒙二十六器服〕吹火筒 同上 竹火筒本草

一名統蘇氏 吹筒雜釋 火管同上 竹火筒必讀

〔和漢三才圖會三十一庖厨具〕吹火筒 火不岐太介

按吹火筒、長尺半許、竹末留一節、鑿小孔、吹火、本綱云、小兒陰被、蚯蚓呵腫、令婦人以吹火筒吹腫處。○中

一種有手鞞天不岐 狀如飯甬、尖有細口、兩面有板張韋、以柄如開闔者、則風出於口、堪熾炭火。

〔寶藏四〕火吹竹

糸あるならしものを弦といひ、竹もてつくれるふき物を管といへり、そのかみ伶倫竹を嶰谷にとりて、六呂六律をわかつて、簫有筚篥有、それより下つかた雲雀笛の雲居に聞え、鹿笛の野山にわたる、みな呂律の聲にもる、事なし、猶こゝに一本有、そのもの竹に大小のえらみもなく、ふしに多少のさだめもなく、きるに寸法もなく、たゞ一穴を以てまるとして、其ふく事いとやすし、われ心みにこれを論せむ、萬のふきものは聲に輕重をなし、指に抑揚有て、習ふにかたく、忘るゝにやすくして、まかも其聲餘所のき、をよろこべるものにして、みな人心の私より出るに似たり、まかるにこのものさのみ心を用ゆる事なく、たゞ通れるを以て其用となせば、道人の心